

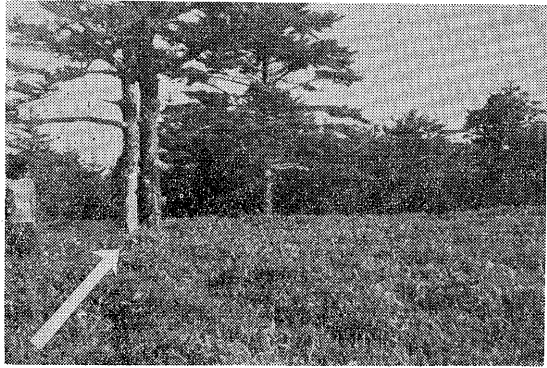
この様な熊の樹皮食害については、30余年間、夏季に大台ヶ原教会に居住する田垣内政一教会長さえこれまで特に注意しなかつたためか、或は類例がなかつたためか気付いた事がなかつたとの事である。

この熊による樹皮の食害は、確かに1953年の年末から1954年の初春にかけて起つたもので、食害に当つてはシラベ、ウラジロモミのみを全く選択的に食害し、これらの樹種に隣接するバラモミ、トウヒの如き樹種は少しも食害していない。そして食害された樹木の中には、既に枯死或は枯死に類しているものもある現状から見ると、恐らくこれらの被害樹は早晚何れも枯死をまぬがれぬものと断定される。

熊が食害するに当つて、何故に樹種の選択をするかについては、未だ不明であるが、田垣内氏は、大台ヶ原の枯損木を薪炭とする際、バラモミ、トウヒの類は格別特殊な樹脂が多く、熊もこれを嫌うように思うとの事である。

何れにしても熊がシラベ、ウラジロモミの類を選択的に食害し、そのため被害樹種のみが枯死絶滅する事を考えると、この地方に於ける針葉樹種の自然分布比率並びに樹種の分布相に著しい変化を生ずることが認められる。

従来吉野連峯中、大峯山系と台高山系とは相隣接し、しかもほぼ等しい高さの山系であるのにも拘らず、両者に自然分布する針葉樹種の分布比率に著しい差があり、特にシラベの分布個体数の如きは、大峯山系に圧倒的に多く、台高山系に比較的少ないなど、これらの針葉樹種の自然分布の原因を究明するに際しては、熊の如き選択的樹種食害枯損による樹種相の変化をも合せて考慮に入れる必要があると考えられる。(奈良女子大学)



牛石ヶ原におけるウラジロモミ(→印)の樹皮が熊に食害された状態。右側の樹はバラモミで食害されない(1954)。

○ハイドジョウツナギ属について (館岡亜緒) Tuguo TATEOKA: On the genus *Torreyochloa*.

従来、日本産の *Glyceria* は *Euglyceria* 節と *Hydropoa* 節に二分され、前者にはムツオレグサ・ヒメウキガヤが入れられ、他は全部後者に入れられていた。Church (1949)* はこの属の細胞分類学的研究を行い、*Hydropoa* に含められていた *Pauciflora*

* George L. Church: A cytotaxonomic study of *Glyceria* and *Puccinellia*. Amer. Jour. Bot. 36: 155-165 (1949)

group が染色体の大きさ及び基本数の点で他の *Glyceria* 属のものとは違っており、花の形質においてもくわしく比較すると *Pauciflora* group をいちじるしく特徴づけているもの一被穎の脈・外穎及び内穎の先端・鱗皮・穎果等—があるので *Pauciflora* group を新しい属 *Torreyochloa* として取扱うことを主張している。日本産の *Glyceria* で形態的に *Torreyochloa* に入ると考えられるものはハイドジョウツナギ及びホソバドジョウツナギの2種である (Church 1949 による)。筆者は先年ハイドジョウツナギ及び *Glyceria* の他の4種 (ムツオレグサ・ドジョウツナギ・カラフトドジョウツナギ・ミヤマドジョウツナギ) の染色体を観察して、日本産のものでも Church ののべた染色体的差が存在することをみたが、今年更にホソバドジョウツナギとウキガヤの染色体をみることができ、一致する結果をえた。秋田県角館町でえたハイドジョウツナギは $2n=21$ (三倍体)、上高地産のホソバドジョウツナギは $2n=14$ で、7の倍数を示し、染色体の大きさは他の *Glyceria* のものより大体3-4倍大きかった。他の *Glyceria* 属のもの染色体はすべて10の倍数を示し、小型-(中型)であつた。染色体的形質のこのような差は *Pauciflora* group は *Pauciflora* group の中で種分化が起り、他の *Glyceria* は別の *Glyceria* の中で起つたことを示しており、この点から Church のいうように *Pauciflora* group を新しい属 *Torreyochloa* とし扱つた方がよいと思われる。

ハイドジョウツナギ及びホソバドジョウツナギの学名は *Torreyochloa viridis* (Honda) Church 及び *T. natans* (Kom.) Church となる。(国立遺伝学研究所)

○ホソバシヨリマ静岡県に自生す (志村義雄・杉野孝雄) Yoshio SHIMURA and Takao SUGINO: *Lastrea Beddomei* newly found in Shizuoka Prefecture.

1954年8月12日に杉野は富士山の西麓、白糸の滝北方約4km、富士郡白糸村の狸沼のほとりで、高さ15-30cmの見なれないシダを採集した。ニッコウシダに似ているが、葉身の毛、葉質、葉脈、葉身の先端の形、小羽片の下部のものが順次耳形を呈する等に異があることから、恐らくホソバシヨリマではないかと考えた。早速京大田川基二博士に御同定を願つたところ、ホソバシヨリマ、との御教示を得たので報告する。

産地は海拔約600mの小沢沼の中で凡そ1m²の範囲に約30-40本位自生していた。この場所には他にミズゴケ類及びキセルアザミ、カキラン、ミズトシボ等の種子植物が混生し、附近にはヤマドリゼンマイ、タニヘゴ、ヒメシダ、オウレンシダ等北方系のシダ類が生育していた。

このシダは海外ではジャバ、フィリッピン、インド、台湾、朝鮮に産し、本邦では現在のところ四国及九州に稀に産すると報告されている。本州では初産地であり、又ここがこのシダの分布の東限地であろう。終りに本種の検定を賜つた田川博士に感謝の意を表す。(静岡大学教育学部及び三島市中郷中学校)